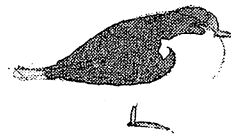


加藤辨三郎 述

浄土和讃

3

文責 本誌編集部



三帖和讃について

これから『浄土和讃』について、順次もうしあげますが、せんじ詰めれば、佛の徳をほめたたえることと、凡夫の疑いの罪という、この二つが詠われているのです。そのすべてが劈頭の二首に要約されているといってもよろしいでしょう。親鸞聖人は、經典のなかの重要なところを和讃にして説かれています。たとえば『大無量寿経』に書かれている浄土など、私のような理屈屋には、ちょっとそのまま信じ

にくいところが出てきます。ところが親鸞聖人は、七宝の講堂も、八功德水でも、池の水でも、みな阿弥陀さまの別号というふうには、何もかも、南無阿弥陀仏で浄土の光景が説かれていると、徹底した佛徳礼讃をなさっています。親鸞聖人は阿弥陀佛一佛を信じて、南無不可思議光といっても、慈光といっても、智慧光といっても、それはみな阿弥陀佛の別号であるとおおせになつていられます。だから親鸞聖人は阿弥陀佛を信じて、わき目も振られなかつたお方でございます。

それから『高僧和讃』は、『正信偈』を読むとすぐわかるように、竜樹菩薩から法然上人までの七高僧のご思想が、ずっと和讃で語られています。これは高僧方を礼讃していらっしゃる。それに違いないが、その高僧方を通じてじつは釈尊および阿弥陀佛、とどのつまり阿弥陀佛の佛徳をたえておいでになるのです。

最後にお作りになったのが『正像末和讃』で、最晩年の和讃です。今度は機の方です。正法の時代のように、八正道とはこのような教えであって、実践するには、しかじかかようだといったふうに修行ができればよい。だが、何分にも今は末世である。そのうえ、われわれは煩惱熾盛、罪悪深重で、自身の始末もつかない凡夫なのです。これを救おうとして立てられたのが、本願であります。しかし、その肝心かなめの本願を凡夫は信じていないのではないか。親鸞聖人は、それを嘆き悲しみつつ、しかもその裏に佛徳を礼讃なさるのです。それが『正像末和讃』であります。その意味で、このご和讃は私の胸に響くのです。私はまさに親鸞聖人のおおせの該当者です。

このように「三帖和讃」の、最初の二巻は佛徳礼讃であって、次の一巻は疑惑和讃というか、慚愧の歌あるいは懺悔

の歌であります。親鸞聖人は煩惱熾盛、罪悪深重と書かれたところに、何という恥ずかしい自分だと慚愧されていられます。罪悪深重、煩惱熾盛というあのお言葉が私自身には、一番痛烈に響くのです。親鸞聖人は、お前もそうか、わしもそうだと教えてくださっているように思えてならないのです。そこに私は親鸞聖人に対して満腔の親しさというか信頼というか、ありがたさを感じるものです。

そういう意味で、劈頭の和讃二首が、佛徳礼讃であり、懺悔滅罪あるいは疑いの罪を高く標榜されたお言葉です。まずもって巻頭にお出しくださったお気持ちをお聞きいただくと同時に、ぜひぶん親切な心の行き届いたご編纂だと思わせられるわけです。

阿弥陀佛の御名

この後には、「讃阿弥陀佛偈に曰く」とあります。これは曇鸞大師の『讃阿弥陀佛偈』を和讃に変えていられるのです。それが次の「弥陀成佛のこのかたは」からのいわゆる十二光のご和讃になっていくわけです。親鸞聖人のこのお気持ちは、私が自分の思いつきで和讃をつくっているのではなく、曇鸞大師の『讃阿弥陀佛偈』によって、この次

の和讃をつくったのですと、非常にご謙譲であるとともに、法を信じられるお気持ちがよく出ています。しかも、「南無阿弥陀佛」という主文を最初に書かれ、その次に曇鸞大師の偈、要するに『大無量寿経』そのもののエッセンスを詩にされました。これは曇鸞大師に対する非常な表敬です。そして「釈して無量寿傍経となづく、讃め奉りてまた安養という」とあるのです。曇鸞大師は『讚阿弥陀佛偈』を『無量寿経』に添えたお経という意味で、「無量寿傍経」と書いておられます。そして極楽とは「安養」とお讃めになつていられるのです。曇鸞大師は、おそらく安養という言葉に深い意味をもったのだらうと思うのです。養うという言葉は、養われる、お育てをこうむる、つまり安らかに安心してお育てをこうむるというお気持ちがあったのだらうと拝察するわけです。

それにつづいて「成佛じょうぶつりこのかた来」という曇鸞大師の偈が一首、漢文のまま紹介されています。それから『讚阿弥陀佛偈』に出る佛の名前、つまり「光」であるとか、「眞実明」であるとか、あるいは「難思議」であるとかと三十七出てまいります。それはほとんど浄土三部経のなかの熟語なのです。

このように曇鸞大師は、特に阿弥陀佛をご信心なされ、阿弥陀佛をほめたたえていられる。そのことが親鸞聖人にはひじょうに感動であつただらうと拝察いたします。わたくし自身にとつても大きな啓発でありました。なるほど、今まで阿弥陀佛、阿弥陀佛ともうしあげていると、いつの間にか固定して、いつも拝んでいる阿弥陀如来の御像が頭のなかに固着しております。それが、浄土で説法なさる講堂も佛の名前。それで涼しい風が吹く、自然の音楽が聞こえるという和讃が出てきます。するとそこに「清浄勲」という言葉が出てきます。その「清浄勲」が佛のお名前とあります。

また経典ばかりではなく、竜樹菩薩の『十住毘婆沙論』のなかに出る「自在人」なども、阿弥陀佛の別号といわれます。『浄土和讃』には、阿弥陀佛の別号が、たまたま三十七出されています。しかし、阿弥陀佛の別号は無量の名があつてしかるべきなのです。とにかくわたくしどもには形のあるものとしか思えません、全部形なき佛のすがた、佛の相、佛の御徳として説かれています。阿弥陀佛という御名も、光に限なく照らして障礙するところがない。どんなところにも行き届くお光なのだ、ゆえに阿弥陀と称する

て、本願が見事に成就して成佛なさった、阿弥陀佛になりたもうた、そしてそれから、もう十劫たっている、ゆえにわれわれ人間は、もう十劫の昔に救われている、なぜならば、本願は、凡夫が成佛しなければ自分も成佛しない、こゝうお約束をなさっている、そのお約束なさったお方が、もう成佛して阿弥陀如来になっておられるのだから、したがってわれわれ人間は、そのとき救われた、救われているのだが、ただ、われわれは煩惱にじゃまをされて、気がつかない、それがやつと今気がつかせて貰ったんだと、大体そういう趣旨でお説きになっているのです。

そういう受け取り方も十分できると思います。しかし蓮如上人が、この説に反対なさった。今日の浄土真宗のあり方を決定的に確立なさったのは蓮如上人です。そのお方が「反対なさったのでわれわれ後輩はまことに困ります。蓮如上人は、そういう考えをしてはならない、そうではなく、まさにと仰せになっているから、これからである、われわれが成佛するのは過去ではなく、未来だといわれるのです。しかし、そういうことになる、わたしとしては、自分が現に教えていただいた先生のお説にしたがうのが、一番素直だと思えます。どんな教えであろうとも、受けるのは

わたし自身が受けていくのです。親鸞聖人が『大無量寿經』をお読みになって、お受けになった深い深い受け取り方と、わたしのような者が読んで受け取る浅いものとは、比較にならないわけです。しかしか比較にならなくても、実際に受けるのは、わたししかないのです。わたしにとってわたししかないのです。わたしは金子大榮先生の教えを仰いでおりますが、先生ご自身がお受け取りになられたこととわたしのでは、それは問題にならないくらい、わたしの受け取り方は浅いのに決まっていると思います。しかし、実際に受けるのはわたしなのです。皆さん方が、それぞれ顔が違うように、境遇もお違いになります。それから、いろいろの物の考え方も、めいめいの考え方があります。したがって、どうしても若干、若干というより自分の体で受ける範囲で受けとるほかありません。

それをいうためには、金子大榮先生から伺って非常に感動したお話をもうしあげましょう。わたし自身はそのお話を何遍も聞きましたし、本にも書かれていられます。それは、「どうでしょうか、親はいつ生まれましようか」と金子先生がおっしゃったのです。わたしはびっくりしました。